ニューガラス関連学会

「GIC 第 3 回ガラス技術シンポジウム」参加報告

ニューガラスフォーラム事務局

Report on the 3rd Glass Technology Symposium sponsored by GIC

New Glass Forum

（豊橋技術科学大学校舎外観）

（シンポジウム会場入口）

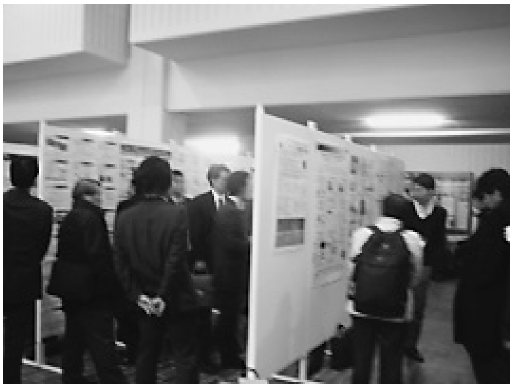
1．経緯

ガラス産業連合会（Glass Industry Conference）がガラス関連 6 団体で設立されて，今年で 8 年目を迎えました。GIC の大きな役割は，板硝子，電気硝子，硝子製品，びんガラス，硝子繊維，ニューガラスに共通する技術課題のフォローです。ところで，ガラスに関する技術の交流が，特に学界と産業界との間で不足しているとの反省から，GIC では，3 年前に，産学交流活性化策として，「ガラス技術シンポジウム」をスタートさせました。具体的には，学界メンバーによる 48 年間の歴史を持つ，「ガラスおよびフォトニクス材料討論会」が 2 日間にわたって開催されているので，その初日に，GIC 主催のシンポジウムを組み込んでもらい，ガラス会社からのプレゼンテーションと，ポスターセッションへ参加することで，産学の交流を深めるものです。初回は滋賀県立大学，2 回目は東京理科大学そして，今回は，豊橋技術科学大学で開かれました。

前の 2 回は，近藤敏和 GIC 技術委員長（日本板硝子上席執行役員）のもと，中尾泰昌 GIC 材料技術部会主査（旭硝子執行役員）と，山本茂副主査（日本電気硝子常務執行役員）が推進してくれました。今回は，近藤委員長のもとで，井上悟 GIC プロセス技術部会主査（物質・材

〒104-0005　港区新橋 2-12-15
TEL　03-3595-2775
FAX　03-3595-0255

（近藤 GIC 委員長と遠方扉前司会・栗林副主査）



（ポスターセッション）

料機構ディレクター）と栗林秀行副主査（日本山村硝子ニューガラスカンパニー社長）がリードしてくれました。

お蔭様で，今回の参加者登録は，大学，会社，独立法人，団体から 185 名にのぼり，盛況なシンポジウムとなりました。

2．当日の状況

急に寒さが深まった，11 月 26 日（木），曇り空のもと，キャンパス内の講義棟を会場としたプレゼンが，13：00–15：10，GIC メンバーからなされました。その概要は次の通りです。「環境とガラス」（元大工試・日本山村硝子寺井良平），「革新的ガラス気中溶解技術」（GIC 主査・井上悟），「ガラス溶融と酸素燃焼技術」（太陽日酸・村上真二），「異種ガラス測定器」（東洋ガラス・滝澤務），「AGC グループ統合 EMS の推進によるグローバルな環境マネッジメントの推進」（旭硝子・五十嵐側仁）。また，ポスターセッションでは，GIC から次の会社・機関が参加しました。旭硝子，セントラル硝子，日本電気硝子，日本板硝子テクノリサーチ，石塚硝子，東洋ガラス，日本山村硝子，日本無機，マグ，太陽日酸，日本琺瑯釉薬，東工大，物質・材料機構，都立産技研センター，硝子繊維協会，ニューガラスフォーラム等。

3．こぼれ話

「ガラスフォトニクス材料討論会」と「GIC ガラス技術シンポジウム」の合同懇親会は，豊橋駅前の，「ホテルアソシア豊橋」で，盛大に行われました。豊橋技科大の西永学長が挨拶に立ち，昨年は，豊橋科技大の創立 30 年目に当たり，それを記念する意味でも，フォトニクス討論会を豊橋科技大に招請したと述べられました。豊橋科技大の実行責任者は，松田厚範教授でした。彼は，日本板硝子の研究者を経て現在に至ったと自己紹介していました。また，教授は，会場演壇に，わざわざ「手筒花火」を飾り立てていました。これは，孟宗竹に荒縄を巻いた筒を，脇に抱えて花火をほとばしらせる，豊橋の自慢伝統です。大学から懇親会場までの移動に，公営バス 3 台をチャータするなど，豊橋科技大側が全力を挙げて準備してくれていた事が，懇親会でも改めて感じ取れました。

ところで，豊橋科技大は，新幹線豊橋駅からバスで 20 分と遠いので，私は，単線の豊橋鉄道渥美線で大学最寄の「向ヶ丘駅」まで行って，そこからタクシーで行こうと思いました。ところが，駅員もいない素朴な駅に降り立ったら，運転手が降りて来て，切符を受け取ったのにはビックリ。当然，タクシーもないので，反対電車で舞い戻り，結局タクシーを使いました。